クレイグ ロバ トソン、カナダ人の元カトリック教徒 前 ： 化の一途だ

：

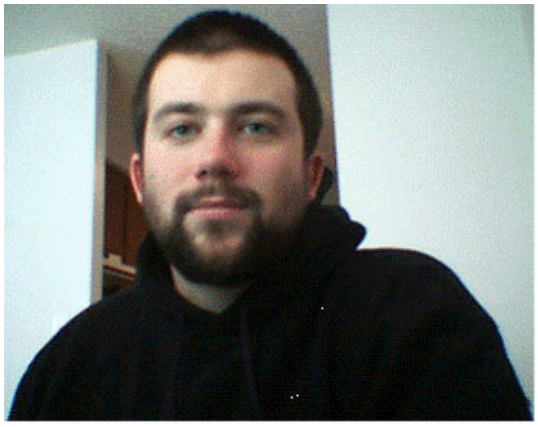
明:クレイグ ロバ トソン

目: 事新改宗者ムスリムの逸 男性

より: Craig Robertson

日06 Sep 2010

集日 06 Sep 2010



カトリックの一家に育ち、幼少期の可也の を教会に通うことに やしたクレイグは、信仰を拒否してスリリングな人生を みます。

私の名前はアブドッラ アル＝カナディ です。私はカナダのバンク バ に生を受けました。ロ マ カトリック教徒であった私の家族は、私が12 になるまで、私をロ マ カトリック教徒として育てました。私はムスリムになって 6年目ですが、私のイスラ ムへの旅についての を、皆 方と共有したいと思います。

どんな物 でも、最初から始めるのが最善でしょう。子供の 私は、カトリックの宗教学校に通い、他の科目と共にカトリックの信仰について学びました。宗教科目は私にとって、いつも最高の授 でした。私は教会の教えに して、学 的に秀でていました。私はとても小さい から、侍者として奉仕するよう に言われました。そしてそのことは、私

の祖父母を非常に喜ばせました。しかし宗教について学べば学ぶほど、私は疑 を抱くようになったのです！ 私は子供の から、このことを えています。私はミサで、母にこう ねました：「 らの宗教は正しいの？ 」そして母の答えは、 在に至っても私の耳に りいています：「クレイグ、全部同じよ。全部いいものなの。」しかし、これは正しいとは思えませんでした。それらが全て正しいのなら、一体私の宗教を学ぶ意味は何だったのでしょうか?

私が12 の 、私の母方の祖母は大 がんと 断され、苦しい 病の末、数ヵ月 に死亡しました。彼女の死がその の私の人生にいかに深い影 を与えたか、私には知る由もありませんでした。12 という幼少の折に、私は神を する（自分の言うことが分かっていればよかったのに！ ）ために 神 者になることを 心しました。私は怒りに溢れた少年であり、世界に して怒っていました。私は自分自身に しても、そして最 なことには神に してさえ怒っていました。私は10代の前半に き、公立高校の新しい「友人」たちに して目立つことの出来るようなことは何でもしようとしました。そして私はすぐ、多くのことを学ばなければならないことに 付きました。宗教学校の庇 の下では、公立学校で学ぶものを学べなかったのです。私は全ての友人たちに、私が学ばなかったことの全てをプライベ トで教えてくれるようせがみました。そして もなく、私は り言 と、自分よりも弱い人々をからかう を会得しました。私はその中に 合しようと最善の努力を いましたが、 にはそうすることは出来ませんでした。私は虐められ、女子からは 鹿にされました。 合出来るように最善を みても、 には出来なかったのです。このようなことは年少者の私にとって、破 的でした。私はいわゆる「感情の 」の中に、引きこもってしまったのです。

私の10代の日々は悲惨と孤独に たされていました。私の哀れな は私に しかけようとしましたが、私は彼らに して好 的で、非常にぞんざいでした。私は1996年の夏に高校を卒 し、物事がより良い方向に わることを予感しました。物事がそれ以上 くなるようには思えなかったのです！ 私は地元の 学校に入学し、教育を身に付けて、幸せになるべくお金を稼ごうと 心しました。私は学 を うために、家の近くのファストフ ド レストランで仕事をしました。

学校 始の数　前、私は仕事先の何人かの友人と一 に引っ越ししないか、と われました。そして私には、これが私の　への答えだ! と思えました。私は家族を忘れ、友人といつも一 にいれるのです。ある 、私は　に引越しする、と しました。彼らは、私にはそうすることが出来ない、まだ 期尚早だから 可出来ない、と言いました。私は17 で、非常に固でした。私は　を り、今日に至るまで私が 悔しているようなあらゆる　の いことを、彼らに言いました。私は新たな自由に大胆になっており、自分が解放され、望むように自分の欲望を追求出来る感じがしていました。私は家出して友人たちと暮らし始め、その　い　とは口を きませんでした。

私がル ムメイトからマリファナを められたのは、 きながら学校に行っていた のことでした。私はその最初の一吹き以降、それが病み付きになりました! 仕事から 宅すると、私はリラックスしてくつろぐために、それを少しふかしたものです。しかしやがて、段々 山吸うようになりました。ある 末などは余りに 山吸ってしまったため、 付いてみれば月曜日の登校　になっていた、などということもありました。私は思いました:「一日くらい休んで、翌日行ってもいいだろう。彼らは私のことなんて、恐らく にしないだろうから。」そしてその 、私が学校に ることはありませんでした。私はついにこう　したのです。あらゆるファストフ ドを盗み、あらゆるドラッグを吸うことが出来るのに、学校など が必要とするでしょうか?

私は素晴らしい人生を送っていました。あるいは、そのように考えていました。また私は仕事 で常 の不良少年になったので、女の子たちは高校 代には私に して示さなかったような注目をし始めました。私は更に いドラッグを すようになりましたが、アルハムドリッラ （神に全ての称 あり）、最 の状 からは救われていました。奇妙なことに、ハイになっていたり、 っていたりしない 、私は惨めでした。私は完全な　さを感じていました。私は「化学的朦 さ」を 持するために、仕事先や友人から盗んでいました。私は周りの人々に して妄想を抱くようになり、警察官が街角のそこかしこで私を追 しているような想像をするようになりました。私は れ始め、解 策を必要としていたのです。私は、宗教が私を助けてくれるのでは、と考えました。

私は魔 に する映画を たのを思い出し、それが完璧に私のためのものであると思いました。私は魔 や自然崇 に する 籍を何 も 入しましたが、それらは天然 の使用を 励していたので、私は引き きドラッグを　しました。人々は私に、「あなたは神を信じますか? 」と ねました。そして「例の影 」下、私たちは奇妙 ぎる会 をしたものですが、私は「信じない」と言っていたことをはっきりと えています。　私は唯一の神のことなど全く信じていませんでしたし、私自身のように不完全な多くの神を信じていました。

これら全ての出来事の にも、私には私を立ち往生させる1人の友人がいました。彼は「新生」キリスト教徒で、事あるごとに私にその信仰をからかわれながらも、私にいつも布教してきました。彼は当 、私のことを めてかからない唯一の友人でした。それで彼が私を若者の 末キャンプに ってくれた 、私は一 に行くことを 心しました。私は全然期待していませんでした。私は 烈な福音 道者たちの全 を 鹿にして、大笑い出来るものと思っていました。2日目の 、 堂で大きな式典がありました。彼らは神を　する、あらゆる の音 を演奏しました。私は老若男女が赦しを求めて叫び、何かにつけて を流すのをました。私は本当に感 し、「神よ、私はひどい人 だったことを知っています。どうぞお助け下さい。私をお赦し下さい。そしてまた一から出直させて下さい。」といった感じに、 言で祈りました。私は感情的高 に囚われ、 が を い落ちるのを感じました。私はこの瞬 、私の 人的主、救い主としてイエスキリストを受け入れることを 心しました。私は 手を空に上げて、踊り出しました（そう、踊ったのです! ）。私の周 のキリスト教徒たちは、私をあぜんとした表情で つめていました。神を信じるなど何て 鹿 鹿しい、とからかっていた男が踊り、神を 美していたのですから!

私は散らかった自宅に り、あらゆる 物と酩酊物 、そして女性を控えました。そして速やかに、友人たちに して、救 を得るためにキリスト教徒になる必要を きました。私は、以前はいつも私に注意を向けていた彼らが、私を拒否したことがショックでした。私は い不在の 、　との 居に 止符を打ちました。そして、なぜ彼らがキリスト教徒になるべきかという 々の理由でもって、彼らを ませました。彼らはカトリックであったため、既に自分たちがキリスト教徒であると感じていましたが、私にとって彼らはキリスト教徒ではありませんでした。彼らは 人を崇 していたからです。私は再び家を出るこ

とを めましたが、今回はより良い条件でした。私は、私の「快 」を支援したがった祖父から、仕事を ったのです。

私はそもそも10代の若者たちが通う、キリスト教徒のユ スハウスに足繁く通うようになりました。それは家族からの 力と、キリスト教に する を避けるためでした。私は殆どの少年よりも年上だったので、最も 言の多い一人となり、少年たちの が になるよう努力しました。しかしそれにも拘らず、私は自分が 欺 であるかのように感じ始めました。私はまた酒やデ トを始めたのです。私は子供たちに、彼らに するイエスの を く一方で、夜は んでいました。このようなことの全てを通して、私のキリスト教徒の友人の一人は私の相 に り、そして私を正しい路 に留めようと努力してくれました。

この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/jp/articles/455

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2024 IslamReligion.com. 断 を禁じます。